オーケストラと共に！

芥川也寸志と新交響楽団

主催　福生市民会館
共催　羽村町公民館

昭52（1977）、12、18

芥川也寸志　新交響楽団演奏会



クリスマス・フェスティバル……　ルロイ・アンダーソン

交響譚詩……伊福部昭

交響曲第5番八短調「運命」……　ベートーベン

●芥川也寸志さんの言葉から

私は時々、音楽って何だろう、と考えます。そういう時、不思議とよく頭の中に浮かんでくるのは新響の前身となるグループの演奏と初めて出会った時の、あの阿鼻叫喚ともいうべき驚きとその光景なのです。楽器がうまく弾けない彼等、アンサンブルがうまく出来ない彼等は、心の底から“音楽が欲しい！アンサンブルが欲しい！”と叫んでいたに違いないのです。

音楽に対するひたむきさ、演奏するよろこびを求める真剣さに出会って、私はいわば契約を結ぶ気になったのです。人数からいえばとてもオーケストラとは呼べませんでしたが、どうせやるなら目標は交響楽団に、という私の掛け声で新交響楽団への第一歩を踏み出したのです。今やプロでもたじろぐようなコンサートまで出来るようになり、昔の面影はまるでありません。しかし、このアマチュアオーケストラはいつも私に《音楽ってなあに》と問い続けているような気がするのです。

ルロイ・アンダーソン

1908年6月29日にマサチューセッツ州のケムブリッジに生まれた。1929年にハーヴァード大学を卒業し、1930年から34年までドイツ語とスカンディナヴィアの語学を学んだが、その間ハーヴァード大学のバンドの指揮者や教会のオルガニストや合唱指揮者もつとめた。コントラバスやテューバ、そしてピアノもひくしオーケストラの指揮や編曲にも多忙であった彼は、やがて語学教師になるという当初の目的を離れ、音楽一本に進むことを決意し、1935年から本格的にその道を歩みはじめた。その後、数多く発表した作品を基盤として、アメリカにおける最も人気のある作曲家としての地位を確立し、その作品は現在もなおしばしば演奏されている。

伊福部　昭



1914年（大正3）北海道の漁港釧路部中に生まれた。少年時代を北海道中部の広漠とした高原で過し、各地方からの移住者達の民謡やアイヌの土俗楽を耳にしながら育った。

こうした生活が彼に音楽と舞踊に関心を深める結果となった。彼は音楽学校に進まず、北海道帝国大学に入り林学を学んだ。このころ早坂文雄を知り新音楽連盟を組織した。

また彼はチニプニンの指導を受けたが、その他はすべて独学であった。主な作品に「交響譚詩」「日本狂詩曲」「ピアノ組曲」などがあり、北方土俗音楽を基盤とした独自な日本スタイルを築いた。

●ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーベン(1770－1827)



ドイツの作曲家。ベートーベンは、ハイドンとモーツァルトによってほぼ完成された古典主義音楽形成を決定的なものにし、さらに強い個性によって最後の結実をもたらした。その作品は9つの交響曲、32曲のピアノ・ソナタのほか協奏曲、室内楽、声楽など多岐にわたっている。初期の作品には、ハイドン、モーツァルトの影響が濃く、中期の作品にはベートーベン自身の奔放な形式の駆使と、苦悩、闘争、悲愴、勝利などを思わせる深刻さにあふれ、傑作といわれるものはほとんどこの中期にかたまっている。『英雄』『運命』『田園』そして『悲愴』『月光』『熱情』また『皇帝』あるいは『フィデリオ』から『エリーゼのために』まで、ポピュラーな名作が多い。耳が聞こえなくなり、後援者だった貴族たちの没落したあとの不遇な晩年には、孤独で冥想的な作品内容になり、あまり一般の人に理解されないが『第9交響曲』と『ミサ・ソレニムス』は有名。今年は没後150周年にあたり、各地で記念演奏会が開かれている。